

小
僧
と
ス
ナ
イ
パ
ー

か
み
た
に
り
き

人
物

伊 貫 剣 三 (4 4) 凄腕スナイパー

村 瀬 ジ ュ ン (9) 小学3年生

桑 島 凜 子 (3 0) 純喫茶『山猫』従業員

名 越 俊 太 郎 (4 0) ジュンの父親

ミ ス ミ (年 齢 不 詳) 伊 貫 の エ ー ジ ェ ン ト

住 渡 透 (6 1) 『住渡製薬』社長

入 間 (4 7) 住 渡 の 秘 書

ヴ ェ ロ ニ カ (享 年 3 4) 伊 貫 の 元 恋 人

カ ル タ 大 統 領 (7 0) ル ウ 国 大 統 領

倉 田 繁 (5 9) 『山猫』の常連

マ ス タ ー (5 5) 『山猫』店主

中 学 生 1 ・ 2 ・ 3 (1 4)

○コインランドリー・外観

住宅街に佇む小さな店舗。

○同・中

店内には伊貫剣三（44）だけである。

丸椅子に腰かけ、ドラム式の洗濯槽の

中で赤いボクサーパンツが規則的に回

るを臍げに見詰める伊貫。

× × ×

（フラッシュ）

鮮血に染まる真っ白なドレスを着たヴ

エロニカ（34）を抱き留め、泣き叫

ぶ伊貫（36）。

× × ×

洗濯槽から咄嗟に顔を背け、苦虫を嚙

み潰したような表情を浮かべる伊貫。

入り口から黒いスーツを着たミスミ

（年齢不詳）が姿を現す。

ミスミ、店内を見回し、伊貫を認める

と会釈を送る。

○東京の街並み・全景（夜）

色とりどりの灯りが見える。
電車の走る音や、車のクラクション音が漏れ聞こえてくる。

○ホテル・入り口前（夜）

待機する報道陣の群れ。
その中にミスマの姿もある。
入り口から、カルタ大統領（70）が
S Pを伴い姿を現す。

フラッシュが一斉にたかれ、報道陣に
手を振るカルタ大統領。
駆け寄る報道陣を制するS P。

記者「一部では貴方の圧政により、多くの国民が疲弊している」という批判的な意見もありますか」

テーブルコーダーを向ける記者を睨み
つけるカルタ大統領。

○ビルの屋上（夜）

腹這いになり、ライフルのスコープを覗く全身黒ずくめの伊貫。耳にはイヤホンをはめている。スコープには報道陣に囲まれるカルタ大統領の姿。伊貫、引き金に指をかける。胸ポケットのスマホが振動し、狙撃の手が止まる伊貫。伊貫、渋々スマホを手にとると、『女性先行。年上男性に憧れる二十代女性と始める最後の恋』という街コンのお知らせメールが目に入る。伊貫、スマホを暫く見詰め、胸ポケットに仕舞う。ライフルの引き金を引く伊貫。

○ホテル・入り口前（夜）

カルタ大統領の頭が吹き飛び、その場に倒れこむ大統領。一瞬の静寂の後、悲鳴が上がり、一斉

に逃げ惑う人々。

S P、大統領に駆け寄るが既に息絶え

たカルタ大統領。

カルタ大統領の遺体を囲みたかれるフ

ラッシュの嵐。

ミスミ、大統領の遺体を無表情で見下

ろす。

○ビルの屋上（夜）

伊貫、スコープから顔を離す。

イヤホンから、

ミスミの声「お疲れさまでした」

耳からイヤホンを外し、ライフルを片

づけ始める伊貫。

○公衆トイレ・中（夜）

洗面台で、入念に手を洗う伊貫。

次に顔を洗い出す。

顔を上げると、隣に立つミスミの姿が

鏡に映っている。

ミスミ「鏡越しに」今回も見事でした。次も
お願いしますよ」

ミスミ、伊貫の足元にジュラルミンケ
ースを置いて立ち去る。
再び、顔を洗い出す伊貫。

○高層マンション・外観（夜）
五十二階建ての建物。

○同・最上階・伊貫の部屋（夜）

3LDKの間取り。

物がなく、綺麗に整頓された室内。

黒を基調とした家具や家電が並ぶ。

伊貫、ジュラルミンケースと包みを持
って帰宅。

伊貫、書棚の上に飾られたヴェロニカ
の写真に、

伊貫「ただいま」

伊貫、手に持った包みを破り始める。
中からミニカーの箱が現れ、箱からミ

ニカーを取り出す伊貫。

ヴェロニカの写真の前には既に七台の

ミニカーが飾っており、その中に買っ

てきた一台を加える伊貫。

伊貫「もう八年か……」

暫く、ヴェロニカの写真を見詰める伊

貫。

× × ×

室内を気が狂ったように探し回る伊貫。

伊貫、キッチンテーブルの下を覗き込

み、椅子の足の間に挟まり、動がなく

なったお掃除ロボットを見つけ、

伊貫「お前、こんなところにいたのか。心配

させないでくれ」

伊貫、充電が切れたお掃除ロボットを

拾い上げ、

伊貫「可哀想に。直ぐに元気にしてやるから

な」

お掃除ロボットを充電器に差し込み、

胸を撫で下ろす伊貫。

○ 純喫茶『山猫』・外観

昭和レトロな雰囲気のお店構え。

○ 同・中

厨房で珈琲をドリップするマスター

（55）。

カウンター席で新聞に目を通す常連客
の倉田繁（59）。

窓際の席に座り、窓の外を楽しそうに

通り過ぎていく父子を目で追う伊貫。

凧子の声「いらつしやいませ」

伊貫の前に、水とおしぼりを置く桑島

凧子（30）。

伊貫、凧子を訝し気に見る。

凧子「ご注文は何になさいますか？」

凧子に訝し気な視線を向ける伊貫に、

厨房からマスターが、

マスター「今日からウチで働いてもらうこと

になった凧子ちゃん」

凧子「桑島凧子です」

頭を下げる凜子に、伊貫も下げ返す。

× × ×

倉田、新聞の一面の『カルタ大統領暗殺』の記事を見ながら、

倉田「独裁者死すか。これでルウロ国も少し

は真面な国になるだろ」

倉田、珈琲を一口飲み、マスターに

倉田「黒幕はやつぱり、政府に不満を持つ連

中だろうね」

マスター、コップを拭きながら、

マスター「ええ。やつぱり、やったのはプロ

ですかね」

倉田「脳天に一撃だもんな。殺した奴は相当

の手練れだよ」

倉田、ページを捲り、別の記事に目を

落とす。

マスター「そーいや、今日は老眼鏡は？ 無

くても見えるんですか？」

倉田、新聞を閉じ、

倉田「それがね。今、老眼に効くいい薬が出

てんのよ。飲み薬で『ボヤケノン』という
んだけど」

マスター、倉田の話に興味津々で耳を
傾ける。

○路上（タ）

下校途中の小学生が行き交う。
その中に、伏し目がちに歩く村瀬ジュ
ン（9）の姿。

前方から男子中学生たちの話し声。

ジュン、前方の中学生三人組に気づき、

来た道を駆け戻る。

逃げていくジュンに気づき、中学生三

人組もジュンを追いかける。

○雑居ビル・婚活イベント会場（タ）

パーテーションで区切られた一角に、
女性（25）と向き合って座るスーツ
姿の伊貫。

伊貫、背筋を伸ばし、女性を睨みつけ

るように座っている。

かなり緊張した様子の伊貫。

そんな伊貫に委縮する女性。

二人の間に沈黙。

女性、伊貫のエントリーシートに目を

落とす。

趣味の欄に『カラオケ』とある。

女性「カラオケが趣味なんですネ」

伊貫「え、まあ」

女性「どういうの唄うんですか？ 意外と米

津玄師とか」

伊貫「ボソッと」いえ、狙いうち」

女性「狙いうち？ 何それ、誰の歌？」

伊貫「ボソッと」山本リンダ」

キョトンとする女性。

再び、二人の間に沈黙。

○鉄橋下（夕）

電車が走る音が響く。

腹を抱え、地面に蹲るジュン。

苦しそうに蹲るジュンを、薄ら笑いを浮かべ見下ろす中学生三人。

中学生1、手に持ったジュンの財布から現金を抜き取り、

中学生1「次はもっと用意しとけよ」

中学生1は空になった財布を放り投げ、その場を立ち去る。

他の二人も中学生1を追いかけて立ち去る。

歯を食いしばり、地面に落ちた財布を見詰めるジュン。

○ジュンの自宅・外観（夕）

二階建ての一軒家。

○同・二階のジュンの部屋（夕）

勉強机に飾られたジュンと父親が楽しそうに写るツーショット写真。

右腕で目元を覆い隠し、ベッドに寝転がるジュン。

口の端には絆創膏が貼られている。
枕元のスマホにラインが届く。
スマホを手に取り、ラインを確認する
ジュン。
ジュンの母親から『ごめん。今日も仕事で遅くなる。夕食はピザでも注文して済まして』というラインが届いている。
ジュン、スマホを放り投げ、背を向ける。
背中を震わせ、すすり泣くジュン。

○純喫茶『山猫』・中

カウンタ―に頬付けを突き、退屈そう
な凜子。
凜子、厨房でコップの水気を拭き取る
マスターに、

凜子「倉田さん、どうしたんでしょうね。最

近、全然姿見せないけど」

マスター「どうやら体調崩して、入院してる

って話だけどー

凜子「え、そうなんですか？！　大分悪いの

かなー

マスター「さあねー

凜子とマスター、倉田がいつも座って

いる席に目をやる。

入り口の鐘が鳴り、小脇に包みを抱え

た伊貫が入って来る。

×　　　×　　　×

伊貫、窓際のいつもの席に腰掛け、包

からブックカバーのされた本を取り出

す。

凜子の声「いらっしやいませー

凜子、笑顔で伊貫の前に水とおしぼり

を置く。

凜子に視線を合わせようとしない伊貫。

凜子「いつもので？」

伊貫、素っ気なく頷く。

×　　　×　　　×

凜子、カウンターまで戻り、マスター

に、

凜子「伊貫さんて、前からあんな感じの人な
んですか？」

マスター「マスター、珈琲をドリップしながら、
マスター「あんな感じって？」

凜子、真剣な表情で本に視線を落とす
伊貫を見ながら、

凜子「いつも、ああやって一人にいるし。何
処か人を寄せ付けないって言うか」

マスター「一人になりたいからウチに来て
んでしようよ」

凜子「そうですけど。結婚はされてるんです
かね」

マスター「さあ。何、気になるの？」
凜子「別にそんなんじゃない」

マスター「凜子ちゃんて、ああいうちよつと
影がある人がタイプなんだ」

凜子「違いますって。ただ、どういう人かち
よつと気になっただけです。それより、早

く珈琲！！」

マスター「はいはい」

慌てて、手を動かすマスター。

× × ×

伊貫、『元ホストが教える女性との会話が弾む十の心得』という目次が付されたページを舐めるように読む。

○高級住宅街・路上

路肩に停まる一台の4WD。

○同・同・車内

運転席で煙草をふかしながら、携帯タブレットを操作する名越俊太郎（40）顎に無精ひげを生やした名越。画面に『住渡製薬』『ボヤケノン』という文字がスクロールされていく。フロントガラス越しに住渡透（61）の姿を確認し、慌てて灰皿で煙草を揉み消し、車外に出る名越。

○ 同 ・ 路 上

飼 い 犬 の ボ ク サ ー 犬 が 用 を 足 し 終 え る
の を 傍 ら で 見 守 る 住 渡 。

名 越 の 声 「 住 渡 さ ん で す ね 」

声 の し た 方 を 振 り 返 る 住 渡 。

住 渡 の 視 界 に 、 此 方 に 会 釈 を お く る 名

越 の 姿 。

名 越 「 ど う も 。 私 、 フ リ ー の ジ ャ ー ナ リ ス ト

で 名 越 っ て 言 い ま す 」

名 越 、 自 分 の 名 刺 を 住 渡 に 差 し 出 す 。

名 刺 を 受 け 取 り 、 名 越 に 不 審 な 目 を 向

け る 住 渡 。

○ 雑 居 ビ ル ・ 外 観

十 階 建 て の 建 物 。

○ 同 ・ 屋 上

ラ イ フ ル の ス コ ー プ を 覗 く 伊 貫 。

ス コ ー プ に は 、 向 か い の ホ テ ル か ら 若

い 女 性 を 伴 っ て 出 て き た 小 太 り の 中 年

男性の姿。
ビルの入り口の扉が開き、ジュンが屋上に現れる。
ジュン、伊貫を気にも留めず、伊貫の背後を通り過ぎ、柵へと向かう。
狙撃に集中し、ジュンに気づかない伊貫。
ジュン、柵を乗り越え、ビルの端に立つ。
青痣の出来たジュンの顔に涙が溢れた。
す。
ジュン、涙を袖で拭い、眼下を見下ろす。
豆粒大となった人々が行き交う姿が見える。
ビルの高さに足が竦むジュン。
ジュン、深呼吸し、目を閉じると身を投げ出す。
ジュンの襟首を掴む男の右手。
ジュン、後ろを振り返ると、慄然とし

た表情でジュンの襟首を掴む伊貫の姿。

ジュン「離してよ！こっから飛び降りるん

だから」

抵抗するジュンを片手で持ち上げ、柵

の中へと引き込む伊貫。

ジュン、尻もちを付き、

ジュン「何すんのさ！僕は今から死ぬんだ。

オジサン、邪魔しないでよ」

柵へと向かうジュンを抱き留める伊貫。

ジュン「離せ！僕なんか死んだ方が、ずっ

と……ずっといいんだ」

伊貫の腕の中で暴れるジュン。

伊貫、ジュンの頬を平手打ちする。

頬を押さえ、驚いた顔で伊貫を見詰め

るジュン。

伊貫、ジュンから視線を外し、

伊貫「すまん……」

ジュン、その場に泣き崩れる。

×××

建物の壁に凭れ、互いに正面を向いた

まま並んで腰を下ろす伊貫とジュン。

伊貫「何故、死のうとした？」

ジュン「俯き、

ジュン「……」

伊貫、横目でジュンを見て、

伊貫「お前が死んだらパパとママが悲しむん

じやないのか？」

ジュン「パパとママは去年離婚した……今

はママと二人暮らし」

伊貫「そうか……それは悪いこと聞いたな」

ジュン、首を横に振り、

ジュン「別に構わないよ。パパとは月に二度

は会えるから」

ジュン、伊貫に顔を向け、

ジュン「其れよりオジサン、スナイパーなん

でしょ？」

伊貫、ジュンから気まずそうに視線を

外す。

ジュン「惚けたって駄目だよ。僕、見てたん

だから、あそこから狙ってるところ」

ライフルが転がっている場所を指さす
ジュン。

伊貫「あれは、なんていうか。その……」

ジュン「それともオジサンは、只の覗き趣味

の変態なの？」

伊貫「馬鹿っ！ 断じて、それだけは違う」

ジュン、伊貫の腕を掴み、

ジュン「僕、オジサンに殺してほしい奴がい

るんだ！ お願いだよ。お金なら払うから、

ね？」

伊貫、視線を下に向け、考え込む。

ジュン「ね、お願いだよ。頼れるのはオジサ

ンしかないんだ」

伊貫、顔を上げ、

伊貫「誰だ？」

ジュン「ホント？！ 僕の事をいつも虐める

クソ中学生三人組」

伊貫「悪いがその依頼は受けられん」

ジュン「何でさ？！ お金ならちゃんと払う

から」

伊 貫 「俺は餓鬼と女はやらん主義だ。それに俺の依頼料は一人につき一億だ」

ジ ユ ン 「えっ？」

伊 貫 「三人となると三億だ。大体そんな金、

餓鬼のお前に払えるのか？」

ジ ユ ン 「それは：：今は無理でも大人にな

ってちゃんと払うから。一生かかったとし

ても払うよ、約束する」

伊 貫 「鼻で笑い」くだらない連中の為に、お

前の一生を無駄にするのか？ 虐めぐらい

自分で何とかしろ！」

ジ ユ ン 「そんなこと言っても、僕は体は小さ

いし、力だっていないし。それに相手は中学

生三人だよ、敵うわけないよ」

伊 貫 「俺が喧嘩の仕方を教えてやる。いいか、

人間には急所つてもんがあるんだ。そこを

狙って攻撃すれば、例えばどんなに屈強な奴

でも」

伊 貫 の話を真剣に聞き入るジュン。

○ 河川敷

T・数日後。

中学生三人に取り囲まれるジュン。

中学生1「今日はたんまり持ってきたんだろ

うな。さあ、寄越せ」

ジュン「お前らにやる金なんて、もうない！」

中学生1、一瞬驚きの表情を浮かべる

と、他の二人の中学生と顔を見やり、

中学生1「どうやらコイツ、死にたいらしい

ぜ」

薄ら笑いを浮かべる中学生三人。

ジュン、叫びながら中学生1に掴みか

かっていく。

○ 廃墟ビル・三階の一室

割れた窓からは、ジュンのいる河川敷

が川向うに小さく見えている。

ライフルのスコップで河川敷を窺う伊

貫。

ライフルには中学生1と取っ組み合う

ジュンの姿が映っている。

○河川敷

馬乗りになり、ジュンを地面に押さえ

つける中学生1°。

抵抗するジュン°。

中学生1「餓鬼のくせして、歯向かうなん

て生意気なんだよ」

ジュン「離せ、この糞！」

ジュンの右拳が中学生1の鼻を直撃°。

鼻を押さえ、悶える中学生1°。

中学生1、掌に付いた自分の血痕を見

て、

中学生1「てめえ！」

鼻血で血だらけの中学生の顔付きが変

わる°。

○廃墟ビル・三階の一室

伊貫が覗くスコープには、右手に持つ

た石をジュンに振り下ろそうとする中

学生 1 の姿。

伊 貫 「おっと、それは流石にルール違反だ」
ライフルの引き金を引く伊貫。

○ 河 川 敷

中学生 1 が右手に持つ石が弾け飛ぶ。

傍に転がるゴム弾。

右手を押さえ、顔を歪める中学生 1。

怯んだ中学生 1 の顎目掛け、頭突きを

繰り出すジュン。

中学生 1、仰向けで卒倒。

ジュン、中学生 1 に馬乗りになり、中

学生 1 の顔を何度も殴りつける。

中学生 1、顔を庇いながら、

中学生 1 「降参だ！ 悪かったよ。もう虐め

たりしないから、許してくれ……」

泣き出す中学生 1。

殴る手を止め、立ち上がるジュン。

ジュン、肩で息をしながら、泣きじゃ

くる中学生 1 を暫く見下ろす。

中学生2「おい、すっかりしろよ」

中学生1に駆け寄る中学生2と3。

中学生2と3に抱きかかえられ、河川

敷を後にする中学生1。

ジュン、川向うの廃墟ビルに目をやる。

○ 廃墟ビル・三階の一室

スコープにはこちらに向かつて、満足

気にサムズアップするジュンの姿。

スコープを覗く伊貫の口元が緩む。

○ 『山猫』・中（タ）

西日が射しこむ店内。

カウンタ―席に座り、凜子に顔の傷の

手当てを受けるジュン

隣の席に腰を下ろし、その様子を見守

る伊貫。

凜子、ジュンの瞼の上に絆創膏を張り

終え、

凜子「ヨシ！　もういいわよ」

ジュン、椅子を反転させ、カウンターの上のパフエに手を伸ばす。

伊貫「凜子に」すみません」

頭を下げる伊貫。

凜子、薬箱を持ちカウンターの向こう

側に回り、

凜子「いえ」

凜子、パフエを頬張るジュンに目をや

り、

凜子「お子さんですか？」

伊貫「あ、いや。知り合いです」

ジュン「オジサンは僕の恩人なんだ」

凜子「え？」

伊貫を見る凜子。

伊貫「苦笑いを浮かべ」なに、ちよつと大袈

裟に言ってるだけです」

ジュン「大袈裟じゃないよ。いじめっ子に勝

てたのはホントにオジサンのお陰なんだか

ら」

伊貫「凜子に」ちよつと喧嘩の仕方を教えて

やっただけです」

伊貫、ジュンの頭を撫でながら、

伊貫「それに何より、自分より体も大きくて

力のある連中に、怯むことなく立ち向かつ

ていったコイツの勇気を褒めてやって下さ

い。坊主、偉かったぞ」

照れ笑いを浮かべるジュン。

凜子「それは勇敢だったわね」

凜子、ジュンの口の周りに付いたクリ

ームに気づき、

凜子「口のどこ、クリーム……」

ナプキンでクリームを拭き取る凜子。

ジュン「お姉ちゃん、有難う」

互いに微笑む凜子とジュン。

伊貫、ジュンに優しい眼差しを向ける

凜子を見て、

× × ×

（フラッシュ）

微笑みを浮かべるヴェロニカの顔。

× × ×

凜子をジッと見る伊貫。

○『住渡製薬』本社ビル・前道路
道のわきに停車中の4WD。

○同・同・4WD車内
スマホのラインを確認する名越。

画面には「僕、この間パパみたいに勇
気を出して、悪い奴らに立ち向かって
いったよ」とある。
画面を見詰め顔が綻ぶ名越。
車の停車する音。

○同・入口前
一台の黒いセダンが停まる。
後部座席のドアが開き、住渡が降りて
くる。

その後続く入間（47）。
足早にビルへと向かう住渡と入間。

名越の声「住渡さん」

住渡、振り返り、駆けてくる名越を見て顔を顰めると、歩を早める。

名越「待って下さいよ」

名越、住渡の後を追いかけているが、

名越「アンタのこの『ボヤケノン』という

老眼改善薬を処方された患者が相次いで心

臓発作で亡くなってるって件」

住渡、無視し、歩き続ける。

名越「アンタの会社、薬と死亡との因果関係

を知りながら、その事実を揉み消してたん

じゃないかって専らの噂なんですがね」

住渡、立ち止まると、名越を振り返り、

住渡「前にも言ったが、そんな事実は一切な

い！ 下らんでっち上げだ」

住渡、再び歩き出し、建物へと入って

いく。

名越「ちよっと、住渡さん！」

建物へと入ろうとする名越の前に、二

人の警備員が立ち塞がり、名越を睨む。

名越「何だよ、そこどけよ！」

両脇から名越の両腕を掴み、取り押さえる二人の警備員。

名越、姿が見えなくなる住渡に、

名越「住渡さん、あなたの会社が必死になっ

てひた隠しにしようとしている今回の件、

絶対に真実を公に暴いてやるぞ！ 離せつ

て！

名越、聳え立つビルを見回しながら、

名越「あなたもこの会社も、もう終わりだ。

覚悟しとくんだな！」

二人の警備員に両脇を抱えられながら、

消えていく名越。

○ 同・エレベーター内

階数が上がっていく表示灯を見詰め

る住渡。

住渡の背後に控える入間。

住渡、表示灯を見詰めたまま、

住渡「野良犬は早めに駆除しておいた方がい

いだろ。これ以上、嗅ぎ回られても厄介だ

からな。まあ、上手く頼むよ」

入間「畏まりました」

扉が開き、エレベーターを出ていく住
渡と入間。

○『山猫』・店内

窓際の席でジュンと向かい合って座る

伊貫。

他の客が食べ終わったテーブルの上の

食器を片付ける凜子。

出口の鐘が鳴り、

凜子「有難うございました」

凜子、テーブルの上を布巾で拭く。

仕事に精を出す凜子を見詰める伊貫。

凜子、伊貫の視線に気づき、伊貫に笑

いかける。

伊貫、慌てて凜子から視線を外す。

伊貫の慌てぶりを見て、笑うジュン。

○路上（夕）

並んで歩く伊貫とジュン。

ジュン「ねえ、オジサン」

伊貫「うん？」

ジュン、伊貫を仰ぎ見、

ジュン「オジサン、凜子姉ちゃんのこと気に

なるんでしょう？」

伊貫「慌てた様子で」な、何だ。急に「

ジュン、伊貫の慌てぶりに笑う。

ジュン「オジサンってホント、分かりやすい

ね」

伊貫、真正面を見たまま、

伊貫「……」

ジュン「オジサンには助けてもらったし、凜

子姉ちゃんのこと、僕が間に入ってあげ

てもいいけど。今度はオジサンが一步、踏

み出さなきゃ」

伊貫「餓鬼が生意気な口きくんじゃない」

伊貫、ジュンの頭を小突く。

ジュン「いてっ！」

ジュン、立ち止まり、頭を押さえる。

ジュン、立ち去っていく伊貫の後ろ姿に
向かって、

ジュン「僕は、オジサンに幸せになつてほし
いんだ。ホントだよ」

立ち去っていく伊貫の口元が綻ぶ。

○コインランドリー・外観

T・数日後。

○同・中

店内には伊貫一人だけである。

丸椅子に腰かけ、洗濯槽の中で、規則

的に回り続ける洗濯物を見詰める伊貫。

伊貫の隣の席に腰を下ろすミスミ。

ミスミ、懷から一枚の写真を取り出し、

伊貫に手渡す。

ミスミ「ターゲットです」

写真に目を落とす伊貫。

写真には名越が写っている。

ミスミ「しかし、この間は参りました。何が

あったかは知りませんが、見す見すターゲット
ットを見逃すなんて。あれ以来、私の信用
はガタ落ちだ」

伊貫「……」

ミスミ「引き受けた以上は必ず、遂行してい
ただかないと困ります。次はあんな事がな
いように頼みますよ」

伊貫「ああ、すまなかった」

ミスミ「では、これ」

伊貫にSDカードを差し出すミスミ。

ミスミ「ターゲットについての詳しい情報が

入ってます」

ミスミ、立ち上がり、

ミスミ「それじゃあ、いいお返事頂けること

を願ってます」

店内から出ていくミスミ。

手に持ったSDカードを見詰める伊貫。

○伊貫のマンション・外観（夜）

夜空に満月が輝く。

○ 同 ・ リビング（夜）

真っ暗な室内でノートパソコンに向かう伊貫。
パソコンの灯りが暗闇から伊貫の顔を照らし出す。
パソコン画面の名越のプロフィールに目を通していく伊貫。
テーブルの上のスマホにジュンからのラインメッセージが届く。
スマホを手取る伊貫。
「今日ね、パパと水族館に行ってきたよ」というメッセージと共に、ジュンとジュンの父親が楽しそうに写る写真がスマホ画面に映し出される。
写真を見て、口元が綻ぶ伊貫だが、次第に表情が曇り出す。
ジュンと一緒に写る名越に目を凝らす伊貫。
伊貫、パソコン画面に目を移す。
パソコン画面に「別れた妻との間に、

9 歳になる一人息子あり。息子は現在、
母親に引き取られ：：「という文字が
並ぶ。

○ 同・ベランダ（夜）

満月に雲がかかり始める。

伊 貫、スマホ片手に、

伊 貫「この仕事は引き受けられん」

ミ スミの声「何故です？ ギャランテイに納

得がいきませんか？」

伊 貫「言つとくが、俺はこれまで金で仕事を

選んだことはない。ただ、今回は：：今

回だけはどうしても気が進まん」

ミ スミの声「そうですか。じゃあ仕方ないで

すね。別の人に頼むことにします」

伊 貫「ちよつと、待ってくれ！ そもそも何

故、この名越という男が殺されなければなら

ないんだ。俺には殺されなければならんよ

うな男には思えん！」

ミ スミの声「さあ、何故ですかね。私にも分

かりません。ただ、はっきりしていることは、この男に生きていられると困る人間が

いるってことです」

伊貫「困る人間って、一体誰だ？！」

ミスマの声「伊貫さん、今日は一体どうしたんですか？随分、興奮なさって。あなたらしくもない」

伊貫「……」

ミスマの声「あなたもよくご存知でしょう。

依頼人については一切明かせないことぐら

い。兎に角、依頼人がいる以上は、我々は

実行するのみです」

齒痒そうにする伊貫。

ミスマの声「まあ、依頼人が亡くなれば話は別ですが。おっと、口が過ぎましたね。それではこれで」

電話が切れる音。

伊貫、スマホを握りしめ、闇に佇むビ

ル群を見詰める。

鼻から大きく息を吐く伊貫。

○公園

子供が楽しそうに遊ぶ姿がチラホラ見える。

ベンチに並んで腰かける伊貫とジュン。二人とも手にはクレールを持っている。

伊貫、滑り台で遊んでいる父と子を見ながら、

伊貫「ジュンはパパの事好きか？」

ジュン「クレールを食べる手を止め、

ジュン「えっ？ 何、急に？」

伊貫「あ、いや」

ジュン「好きだよ。だってパパは正義の味方

だもん」

伊貫「正義の味方か」

ジュン「パパはね、悪い奴らを記事にして懲

らしめてるんだ。僕も大きくなったらパパ

のようなジャーナリストになって、悪い奴

らをやっつけるんだ」

伊貫「ジュンのパパはカッコいいんだな」

ジュン「うん！」

伊貫、満面の笑みを向けるジュンの頭を撫で続ける。

○ 倉田の家・外観

二階建ての一軒家。

塀の表札には「倉田繁」の文字。

○ 同・前道路

4WDの車が停まっている。

○ 同・玄関先

玄関扉が開き、中から名越が現れる。

名越、中に向かって、

名越「それでは、また伺います」

頭を下げ、玄関扉を閉める名越。

○ 4WD・車内

名越、運転席に座り、テーブルコーダ

ーに向かい、

名越「倉田繁（59）、二週間前に突然の心臓

発作により死亡。『ボヤケノン』の服用歴あり。妻の話によれば、心臓の持病はなかったらしい」

助手席のドアが開き、伊貫が乗り込ん

でくる。

名越、伊貫に驚きの表情を向け、

名越「何だ、あんた？！」

助手席に腰を下ろす伊貫。

名越「ちよっと、何してるんだ？！さっさ

と降りてくれ、でないと警察……」

伊貫、スマホを手に取る名越を制し、

伊貫「まあ、待て。あんた、ジュンの父親だ

ろ？」

伊貫、名越をジッと見る。

伊貫に怪訝の表情を向ける名越。

○ビルの屋上

ライフルのスコップを覗く伊貫。

その傍で、伊貫の様子を窺う名越。

伊貫「よし、あれが丁度いいだろ」

伊貫、名越にライフルを手渡し、
伊貫「これで、道路を挟んで向こう側の歩道を歩く親子連れを見てみる」

名越、訝し気にライフルを受け取り、
スコープを覗き込む。
スコープには手を繋ぎながら歩く女性と女兒の姿が映る。
女兒の手には真っ赤な風船が握られて

いる。
伊貫の声「女の子が持つてる風船が見えるだろ？」

名越、スコープを覗き込みながら、

名越「ああ」

伊貫の声「今から、それを此处からそのライフルで撃ち抜く」

名越、スコープから顔を離し、伊貫を見る。

名越「撃ち抜くって言うても、此处からだと優に三百メートルはあるぞ」

伊貫、名越からライフルを奪い取り、

伊貫「お嬢ちゃん、悪く思わないよ」

構えたライフルの引き金を引く伊貫。

伊貫、撃ち終え、ライフルを名越に再

び手渡す。

名越、半信半疑でスコップを覗き込む。

スコップには歩道に座り込み、泣きじ

ゃくる女児の姿。

女児の傍に割れて落ちた風船の残骸が

見える。

名越、スコップから顔を離し、

名越「あんた、一体……」

伊貫を訝し気に見る名越。

× × ×

柵に寄りかかり、ビル街を見渡す伊貫。

伊貫の背後に立つ名越。

伊貫「さっきので、俺が言ったことを信じる

気になったか？」

名越「ああ。しかし、あんたみたいな凄腕の

スナイパーを雇ってまで俺を殺そうなんて、

一体誰が……」

名越、暫く考え、
名越「もしかして……」

伊貫「ホシに心当たりがあるのか？！」

名越、首を横に振り、

名越「いや。しかし、確証がない」

伊貫「いいから言ってみろ！誰だ？！」

伊貫、名越の両肩を掴み、詰め寄る。

○『住渡製薬』本社ビル・外観

○同・一階ロビー

清掃員に扮した伊貫が、帽子を目深に
被り、床のモップがけをしている。

入り口の自動ドアが開き、住渡と入間
が現れる。

伊貫、近づいてくる住渡と入間を横目
で確認しながらモップがけを続ける。

横を通りかかった住渡に、体を投げ出
しぶつかる伊貫。

伊貫、伏し目がちに、

伊貫「す、すみません」

伊貫、慌てて住渡のジャケットの乱れを執拗に直す。

住渡「もういい、汚い手で触るな！」

住渡、ジャケットを手で払うと、頭を下げる伊貫に顰め面を向け、再び歩き出す。

足早にエレベーターへと向かう住渡と入間。

エレベーターの扉が開き、乗り込む住渡と入間。

× × ×

モップがけをする伊貫のイヤホンから、住渡の声「例の名越っていう男の件だ……」

モップがけの手を止め、イヤホンに手をやる伊貫。

○ 同・エレベーター内

階数が上昇していく表示灯を見詰める住渡。

住渡の背後に控える入間。

住渡「何とかかなりそうか？」

入間「はい。その筋のプロに現在、当たって

おります」

住渡「そうか。出来るだけ早くな。それと、

殺害を指示したのが、我々だとはくれぐれ

も分からんようにな」

入間「十分、承知しております」

表示灯が七階で止まる。

○同・一階ロビー

イヤホンに耳を傾ける伊貫。

イヤホンから、エレベーターが止まる

音が聞こえてくる。

伊貫、モップを清掃カートに差し込み、

足早に清掃カートを押して立ち去る。

○桁下

薄闇の中にミスマの靴音だけが響く。

前方に、腕組みをし、壁に凭れる人影

が見える。

人影に近づいていくミスミ。

伊貫の声「遅いじゃないか」

薄闇から伊貫の顔が浮かび上がる。

ミスミ「すみません、色々立て込んでまして。

其れより、こんな所に呼び出して一体何の

用ですか？」

伊貫、壁から体を離し、

伊貫「この間の依頼の件だが、やはり引き受

けることにする」

ミスミ、驚きの表情で、

ミスミ「ほう……あれ程、拒んでいらした

割にどういった風の吹き回しですか？」

伊貫、ミスミにムツとした表情を向け、

伊貫「悪いか？」

ミスミ「いえ、此方としては貴方にやって頂

けるんであれば、これ以上有難いことはあ

りませんよ」

伊貫「なら、ごちゃごちゃ言うな。やると言

ってるんだ」

伊貫、ミスを鋭い眼光で睨みつける。

怯むミスミ。

伊貫、視線を下に向け、

伊貫「(呟くように)それに……この件は俺

の手でカタをつけたい」

ミスミ「伊貫さん、あんた……」

伊貫、その場から立ち去っていく。

ミスミ、伊貫の後ろ姿に向かって、

ミスミ「詳細決まったら、また連絡します」

ミスミ、訝し気に伊貫の後ろ姿を見詰

める。

○伊貫のマンション・リビング(夜)

伊貫、スマホ片手に、薄暗いを室内を

動きまわりながら、

伊貫「明日の十四時に表参道のカフェだ。丁

度、同じ頃に奴も姿を現すはずだ。ああ、

わかつてるよ。抜かりはない」

伊貫、電話を切ると、書棚の上のヴェ

ロニカの写真に向かつて。

伊 貫 「これしかないんだ」

ヴェロニカの写真をジッと見る伊 貫。

○ 純喫茶『山猫』・外観

T・翌日。

○ 同・中

窓際の席で向かい合って食事をする伊

貫とジュン。

サンドイッチを頬張るジュンを見詰め

る伊 貫。

ジュン、伊 貫の視線が気になり、

ジュン 「そんなにジロジロ見られたんじゃ、

気になって食べられないよ」

伊 貫 「あ、すまん」

伊 貫、ジュンから視線を外す。

ジュン、ピーマンだけを食べ残した伊

貫の皿に目をやり、

ジュン 「あ、またナポリタンのピーマン残し

てる。オジサン、好き嫌いは駄目だよ。ち

やんと食べないと凜子姉ちゃんに言うからね」

伊貫「……：　：　そうだな」

伊貫、ピーマンにフォークを伸ばし、

伊貫「なあ、ジュン」

ジュン「うん？」

伊貫「ジュンはパパの事、その……」

ジュン「オジサン、どうしたの？　この前か

らパパのことばかり。何か変だよ」

伊貫「いや……」

伊貫、腕時計に目をやる。

時刻は十二時半過ぎである。

伊貫、立ち上がり、

伊貫「もう行かないと」

伊貫、財布から千円札二枚を取り出し、

伊貫「悪いがこれで払っておいてくれ」

テーブルの上に二枚の千円札を置いて

立ち去る伊貫。

ジュン「オジサン！」

駆け出ていく伊貫の後ろ姿を訝し気に

見詰めるジュンと厨房のマスター。

× × ×

綺麗に平らげられた伊貫の皿を見詰め

るジュン。

マスターの声「何か今日の伊貫さん、変だっ

たね？」

空になった伊貫の皿を片付け始めるマ

スター。

ジュン「やっぱり、マスターもそう思った？」

マスター「ああ、いつもの伊貫さんて感じじ

やなかったな」

ジュン「そうなんだよね。いつもは残すピ―

マンも今日は素直に食べたし、それにやた

らパパのこと：：」

マスター「思い詰めてるって言うのか、何か

を決心したって言うのか」

ジュン「決心？」

マスター「そう。此处を出ていくときの伊貫

さんの背中、あれは間違いなく覚悟を決め

た時の男の背中だ」

ジュン「もしかして……」

次第に顔が陰しくなるジュン。

ジュン「そんな、嘘でしょ」

慌てて駆けだすジュン。

マスター「あ、おい！」

○表参道・オープンカフェ

歩道に立ち並ぶテーブルと椅子。

その一角に、ノートパソコンを開き、

軽快なキーボードの音を響かせる名越

の姿がある。

画面には「死を呼ぶ特効薬・ボヤケノ

ンの真実」の文字。

名越の席から二席後ろの席で新聞を広

げ座るミスミ。

ミスミ、広げた新聞の陰から名越の様

子を窺う。

名越、落ち着かない様子でパソコン画

面の時計表示に目をやる。

時刻は「十三時五十五分」である。

テーブルの上の名越のスマホが振動し、手に取る名越。

スマホ画面には「パパ、今どこ？」と

ジュンからラインが届いている。

ミスミ、腕時計に視線を落とし、

ミスミ「伊貫さん、聞こえますか？」

胸元の小型マイクに囁きかけるミスミ。

○『住渡製薬』本社ビル・入口前

一台の黒いセダンが停車する。

○向かいのホテル・五階の一室

窓際に置かれた椅子に腰を下ろし、ラ

イフルのスクリーンを覗く伊貫。

伊貫の耳にはめられたイヤホンから、

ミスミの声「伊貫さん、聞こえますか？」

伊貫、スクリーンを覗きながら、

伊貫「ああ」

ミスミの声「時間です。さあ」

伊貫「いや、まだだ」

○表参道・オープンカフェ
行き交う通行人の数が増えだす。

ミスミ「さあ、早く」

ミスミ「まだ早い」

伊貫の声「まだ早い」

ミスミ「まだって、通行人が増えてきてます。

早くしないと厄介だ」

周りの建物を見渡すミスミ。

○ホテル・五階の一室
スコープには黒いセダンの運転席から

降り、後部座席へと回る人間の姿。

ライフルの引き金に指をかける伊貫。

スコープは後部座席から姿を現した住

渡の姿を捉える。

伊貫「よし、いまだ」

引き金を引く伊貫。

○表参道・オープンカフェ

名越を素早く見るミスミ。

キーボードを打ち続ける名越。

ミスミ「伊貫さん？」

ミスミ、再び名越に目をやるが、平然とパソコンに向かう名越。

ミスミ「伊貫さん？ 伊貫さん聞いてますか

？」

ジュンの声「パパ！」

名越が振り返ると、目に涙を浮かべ立

ち尽くすジュンの姿。

名越のスマホにラインが届く。

画面には伊貫から「終わったぞ」とい

うラインメッセージ。

胸を撫で下ろす名越。

ミスミ、泣きながら名越に抱きつくジ

ュンを見ながら

× × ×

（フラッシュ）

伊貫「それに：：この件は俺の手でカタを

つけたい」

視線を下に向け物憂げな表情の伊貫。

ミスミ	ミスミ	ミスミ	×
「まさか	ミスミ、	×	
：	大きく	×	
」	目を見開き、	×	
ミスミ、立ち上がり慌てて駆け出す。			

○ 住 渡 製 薬 本 社 ビ ル ・ 入 口 前

救急車と警察車両が停まり、人だかり

が
出
来
て
い
る
○

人だかりを掻き分け、最前列に躍り出

るミスミ。

布をかけられた担架が救急隊員によつ

て運ばれていくのが見える。

地面には血だまりが出来ており、その

傍でへたり込むワイシャツを血で汚し

た
入
間
○

×

×

×

人の群れとは逆方向に、力なく歩くミ

スミ。

ミスミ「この件は俺の手でカタをつけたいね

フ
ツ
」

ミスミの口元が緩む。

ミスミ「伊貫さん、あなたには一本取られました。やっぱり、あなたは一流だ」

高笑いするミスミを周りの人々が訝し気に見る。

○橋の上（夕）

西日を反射して煌めく川面を朧げに見下ろす伊貫。

スマホにラインが届き、画面を確認する伊貫。

伊貫、「オジサン、パパを助けてくれて有難う。事情は全部、パパから聞いた。

やっぱり、オジサンはカッコいいや」というジュンからのラインを見て

顔が綻ぶ。

伊貫、ラインの続きに目を通す。

「そんなオジサンの事を好きにならな

い女の子の人はいないと思うよ。きっと凜子姉ちゃんだって、だから頑張ってる！」

とあり、画面を暫く見詰める伊貫。
伊貫、意を決したように肩にかけていたライフルケースを川に放り投げると力強く歩き出す。

○ 純喫茶『山猫』・中（夜）

窓際の席に座り、落ち着かない伊貫。
窓の外は日が落ち、薄暗い。

凜子の声「はい、お待たせ」

伊貫の前に珈琲を置く凜子。

伊貫、軽く頭を下げ、伏し目がちに

伊貫「あの……」

凜子「はい？」

伊貫、顔を上げ、

伊貫「良ければその、この後……食事でも」

驚いた表情を浮かべる凜子。

伊貫「すみません。変なこと言つて、忘れて

下さい」

凜子「いいですよ」

伊貫「えっ、本当に？」

凜子「はい。でも、私まだ仕事だから待って
もらわないと駄目ですけど」

伊貫「待ちます、待ちます。何時間でも」

マスター、互いに笑顔を浮かべる伊貫

と凜子を厨房から見ながら、

マスター「あの時の決意の背中ではこれだった

のか」

妙に納得するマスター。

× × ×

接客する凜子の横顔を見詰め、珈琲に

手を伸ばす伊貫。

伊貫「ジュン、ありがとうな」

一口飲み、窓の外に目を移す伊貫。

（了）